

平成 2 3 年度学校評価書

学校名	兵庫教育大学附属小学校
-----	-------------

1 学校教育目標

人間として生きぬく力を育てる
・ねばり強く問いつづけ、よりよいものを創り出す子
・はげまし、支え合い、共に伸びる子
・強い心とたくましい体をつくる子

2 自己評価結果（達成状況）【A：達成している B：概ね達成している C：あまり達成していない D：達成していない】

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策
教育活動	確かな学力を形成するための取組 ・教育課程の改善や学習指導方法の工夫などにより確かな学力の形成をはかる。	「自己を形づくる」学級の構築（3年次）のテーマの元、年間を通して、前期授業研究会、後期授業研究会、そして研究発表会と、教師は力量を高めながら、児童の学力形成に尽力した。	A	
	豊かな心を育むための取組 ・全校縦割りの集団活動や道徳教育などを通して豊かな心を育むことをめざす。	行事や異学年交流を通して、豊かな心を育むことができた。道徳を学校教育の要として、道徳教材の開発や授業に力を入れた。	A	
	健康な体を培うための取組 ・様々な体験的な活動などを通して健康な体を培うことをめざす。	体育の価値や学習の特性に応じたバランスの良い授業展開に取り組めた。林間、臨海、マラソン大会等で体力とともに、強い意志力を育んだ。	A	
学校運営	組織運営 ・附属学校長がリーダーシップを発揮し、大学・学部と一体となった学校運営を行う。	校長・副校長・教務が常に全体を見据えた経営を心掛け、全職員、共通理解の下、教育活動を展開することができた。	A	
	教育実習 ・大学の計画に基づき、実習生の資質・能力を高められるような実地教育を行う。	大学での指導が徹底されているので、実習生の質の向上が見られた。担当教員の経験や専門性を生かしながら、小学校現場に則した指導を行った。	A	
	大学・附属中学校・附属幼稚園との連携・協力 ・附属学校運営会議のマネジメントのもと、大学・学部と一体となった附属学校園の連携を進める。	従前の附属学校園連携委員会・連携推進協議会に加え、今年度は、小学校、中学校でお互いにオープンスクールを利用して参観し合う取組をした。	B	小学校、中学校の教員間で共通理解を一層推進するため、双方の年間行事等も含めた調整を行う。
	保護者との連携協力 ・学校教育目標の達成をめざし、保護者と学校の連携を進める。	愛校作業、カーニバルでは、保護者と教員が共同で作業を行い、相互の絆を深めることができた。研究発表会では、保護者ボランティアとの連携によって、接遇面でも、参加者より高い評価を得ることができた。	A	

3 分野・領域ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
教育活動について学校が行った評価は、概ね妥当である。表現力やコミュニケーション能力も、学校外から高い評価を受けている。 附属小学校の伝統文化を守りながらも、一層の学力の向上を目指して、頑張ってもらいたい。 附属小学校の教員は、研究、実習生指導と多忙であるが、若い教員が増える中で、子どもと触れ合う時間の確保も期待するところである。
学校運営の分野・領域については、学校が行った評価は概ね妥当である。 最近では、保護者への対応も難しくなっていると聞くが、経験の少ない若い教員は大変だと思う。 管理職が直接的に若い教員を指導するばかりではなく、学校全体として中堅教員が若い教員をフォローできる体制を強化することで、双方が話しやすい環境作りに努めてほしい。 幼稚園からの連絡入学について、保護者の一部が、不安を抱えているケースがある。一つは、連絡進学で小学校に入学できるかどうかの不安であり、もう一つは、特別支援員の関わりが必要と考えられる児童と一緒に学習できるのかという不安である。両方の不安に対応できる何らかの手立てや配慮を講じてほしい。

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策
研究活動	大学との研究協力 ・大学教員と附属学校教員が研究テーマを共有し、大学・学部内の人的・物的資源の効率的活用を図る。	各教科等において共同研究という形で年々積極的に進められようになってきた。加えて、今年度は、海外からの研究視察に小学校として意欲的に協力した。	A	
	大学との連携体制 ・大学・学部の教員が研究実践の一環として附属学校で授業を担当する。また、附属学校教員が大学・学部の授業を担当する。	大学授業(リフレクション及び学部授業)において、附属学校教員が担当した。(国語2名、理科3名、美術1名、初等生活1名、体育1名) 大学から3名の教員が本校の授業を担当した。(和言葉1名和楽器1名、和食1名)	B	授業の配当が急に決まることがあるので、大学、小学校で、相互に年間計画を調整しあう等して、見通しをもって割り当てを行う。
	全国規模の研究協議会の開催等による地域を越えた普及・啓発 ・附属学校の研究成果について、地域を越えた全国規模の普及・啓発を図る。	本年度は1日開催であったが、国内では東北・青森から、九州・鹿児島まで、また、外国からは韓国とドイツからも参加があり、総勢600名を超える参観者を得ることができた。当日は、好天に恵まれ、授業参観、研究協議や出版物を通して、本校の研究成果を広めることができた。さらに、千葉大学小林正弥先生を迎えて行われた、本校児童との対話型講義や後の講演に多くの教員が真剣に聞き入っていた。	A	
	研究開発学校制度等の活用 ・文部科学省等による研究開発指定などを積極的に活用し、教育課程や指導方法についての先導的・実験的な研究を行う。	平成21年度～平成23年度文部科学省指定「研究開発学校」の最終年度として先進的且つ特色ある英語教育の実践に努めた。	A	
安全管理等	防災教育 ・実践的な態度や能力を育てる防災教育の推進を行う。	担当を中心に計画的に防災訓練を実施し、児童の実践的防災能力を高めた。(1学期、不審者対応(幼稚園との合同訓練)。2学期、火災。3学期地震)	A	
	健康・安全教育 ・生命を尊重する健康教育と安全教育の推進を行う。	全学年を通して、学級活動の場で指導したほか、特に2年生の生活科、4年生「総合学習」(赤ちゃん会)において、生命を尊重する取組を重点的に行った。	A	
	施設設備 ・児童の学校生活の場にふさわしい施設設備を整える。	遊具及び教室の施設、備品について、定期的に安全点検を行い適宜、補習や危険回避措置を講じた。改修計画を立て具体的な整備を推進している。	A	
	安全管理 ・児童にとって安全・安心な環境を整える。	植え込みの刈り取り、ヤスズメバチ対応等、日常的な安全管理には配慮している。附属学校安全委員会によって「附属学校園における安全確保及び安全管理の手引」改訂を行った。	A	

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
研究活動の分野・領域については、学校が行った評価は概ね妥当である。附属小学校で深めている研究を附小交流会等でさらに充実させるなどして、周りの地域の学校にも広める取組を一層発展させてほしい。
安全管理等の分野・領域については、学校が行った評価は概ね妥当である。不審者対応として、ハード面の整備を一層充実させてほしい。普段の学校生活に於いても、入口付近にテレビや棚などをおいて避難時に支障が出ることがないようにしてほしい。非常ベルや、ポリカーボナイトの盾などのハード面の充実もお願いしたい。